

# 「歌をうたうということ」

～日本語を母語としない生徒への歌唱指導の可能性～

なかにしあかね

はじめに

1. 生徒の状況
2. 授業の目的
3. 題材
4. 事前準備 ①共通のイメージを醸成する
5. 事前準備 ②各自のイメージの違いを認識する
6. 事前準備の過程における生徒の変化
7. 授業当日の流れ ① 生徒の作品発表
8. 授業当日の流れ ② 「ふるさと」前半
9. 授業当日の流れ ③ 「エーデルワイス」
10. 授業当日の流れ ④ 「ふるさと」後半
11. 考察

はじめに

仙台市泉区にある東北インターナショナルスクール（以下 TIS）より、宮城学院女子大学の入試広報・地域貢献の一環として行われている大学教員による出張授業のご依頼を頂いたことから、このプロジェクトは始まった。依頼者は TIS 日本語教員のヒューレット柳澤えり子先生、ご依頼の内容は、日本語を母語としない生徒を含む中学生・高校生 45 名への歌唱指導であった。

「歌をうたうということ」をテーマとする筆者のセミナーは、歌詞からイメージを膨らませてさまざまに演奏表現が変化することを体感することを通して、「声」の可能性や「歌」の可能性への気づきを導き、人生のパートナーである声と共に、歌を友に、豊かに生きる糧となることをめざすものである。

このテーマでこれまでにお受けしたセミナーのご依頼は、すべて日本語を母語とする受講生を対象としたものであり、日本語を母語としない生徒を対象とする英語での授業は今回が初めてであった。英語での歌唱指導は、筆者にとっては日本語での指導よりもストレートな言葉の扱いに

なる傾向があり、たとえば合唱団からのご依頼で演奏を練り上げる講習会などでは、めざす演奏の方向性を明確にするにあたって有効に機能する場合もある。この場合、受講者となる団員は、この演奏をこの演奏機会のために仕上げるという目的を共有していることが前提として存在する。今回の授業の対象となる TIS 生徒達は、このセミナーを受けるにあたっての目的意識を共有していない状態であり、民族的にも言語的にも個人的にも、音楽経験も人生経験も様々に異なる。このような生徒達に対峙したとき、このテーマでの英語でのセミナーは、どのような展開を持ちうるであろうか。特に、歌詞のイメージの共有を前提としないインターナショナルスクールの生徒達の間で、どのような音楽表現の可能性が広がるものか大変興味深い挑戦であると考え、お引受けすることとした。

このような学校教育の現場との連携は、窓口となって下さる教諭との相互理解や、共に楽しんでアイデアをやり取りし合うことができ、事前の授業で生徒達に的確な準備をして頂ける環境が不可欠であるが、依頼者であるヒューレット先生は日々の日本語教育の中に歌を取り入れておられ、ご自身も地域の合唱団員として拙作を含む様々な音楽作品に触れておられることから、とても心強いパートナーを得ることができたと考えている。今回の授業を研究対象とさせて頂くことをご快諾頂けただけでなく、筆者と TIS 教員とのコラボレーションとして楽しんで取り組んで下さったことに、心から感謝している。

授業は 2017 年 10 月 24 日に実施することになったが、3 週間前にヒューレット先生との事前の打ち合わせを行い、生徒達の状況を確認し、この授業を活用するアイデアや可能性を検討し、当日までの授業の中で準備して頂くことなどを話し合った。以下、事前打ち合わせの内容から当日の授業の様子、そこから得られた考察を、順を追って述べていく。

## 1. 生徒の状況

東北インターナショナルスクールの中高生は 45 名、うち日本人（日本語母語者）が半数以上であり、残る半数未満の生徒の出身国は、韓国、中国、パキスタン、アメリカ合衆国、カナダ、スペイン、インド、ガーナ、オーストラリアなどである（今年度の高校 2 年生、高校 3 年生には日本人はいない状況）。学校内の共通語は英語であり、週 3 回の日本語クラスがある。日本語ネイティブでない生徒達も滞日 1 年～3 年程度で、簡単な日本語は理解する。

## 2. 授業の目的

ヒューレット先生がこの出張授業を依頼された目的は、狭義には日本語クラスで日本語習得のために歌をうたうことを生徒達の間でよりスムーズに行えるようにしたいということ、また、広い意味では、日本語学習にとどまらずスクール全体として、総合学習的に生徒達の視野を広げる機会となることを期待している、とのことであった。

### 3. 題材

授業の題材として、TISの音楽教員メッサーノ先生の希望を含んで、「ふるさと」（高野辰之作詞 岡野貞一作曲 文部省唱歌）と、「エーデルワイス」（オスカー・ハマースタイン2世作詞、リチャード・ロジャース作曲）の2曲を要望された。「ふるさと」は日本語で、「エーデルワイス」は英語で歌う。調性については、事前の打ち合わせの中で生徒達の音域に制限があることが推察されたので、「ふるさと」をへ長調（c-d）で、「エーデルワイス」を変口長調（d-c）で歌うこととした。

### 4. 事前準備 ①共通のイメージを醸成する

インターナショナルスクールならではの特性として、生徒達が歌詞を見たときに抱くイメージの共通項が少ないと予想される。この状況を2つの異なる方向へと発展させ、総合的な学習へと展開させることを考えた。

まずひとつは、文化・歴史的背景や言葉の背景などの基礎情報を共有していない生徒達が、ある程度の共通イメージを共有しやすくするための準備である。ひとつの曲を、声を合わせて歌う時に必要となる準備であり、前述の狭義の授業目的にも即したクラスの一体感や、クラス授業で歌うことの楽しみを醸成させる。

具体的な準備として、まず、「ふるさと」は、現代の日本の生徒達にも理解しにくい文語体で歌詞が書かれており、辞書的な言葉の一語一句の意味を知るだけでなく、文部省唱歌が生まれた背景や、日本の里山の風景、詩に詠まれた懐かしさの質を理解することが必要となると考えた。さらに、たとえば他国のふるさとを歌った歌（例：Home, Sweet Home）などと比べて日本の「ふるさと」に特有であるのは「故郷に錦を飾る」感覚があることで、この感覚を生徒達がどうとらえるかは民族性の上でも非常に興味深いと思われる。これらについて、事前の日本語クラスでとりあげて頂くこととした。

「エーデルワイス」については、映画「サウンド・オブ・ミュージック」の中でこの歌が歌われる場面を知るために、できれば事前の授業で映画を見ておくなどして前後の文脈を理解させておいてもらうこととした。結果的に、クラスによって、あらすじを読んだクラス、映画の中で「エーデルワイス」の歌われる場面だけを抜粋で見たクラス、動画を検索してみたクラスなど、方法はまちまちながら、ひとつおりの基礎知識を入れて頂いた。

### 5. 事前準備 ②各自のイメージの違いを認識する

もうひとつの方向性は、それぞれの文化的背景や経験、イメージするものの違いをお互いに出し合い、尊重しつつ認識しあう準備である。これは、お互いの文化、異なる文化を理解することにもつながり、同時に、改めて自身のアイデンティティーを見直すきっかけともなる。

筆者がアイデアとして提供したのは、「ふるさと」の歌詞から絵を描く、自分なりの新しい歌詞を作る、等であったが、結果的に以下のワークに発展させて下さった。

- ふるさと の歌詞をイメージして絵にする
- 自国の言葉に翻訳して清書する
- 歌詞のマイ バージョンを作る

これらの事前準備を通して生徒に生じた変化を、ヒューレット先生から詳細なメールでお知らせ頂いた。

## 6. 事前準備の過程における生徒の変化

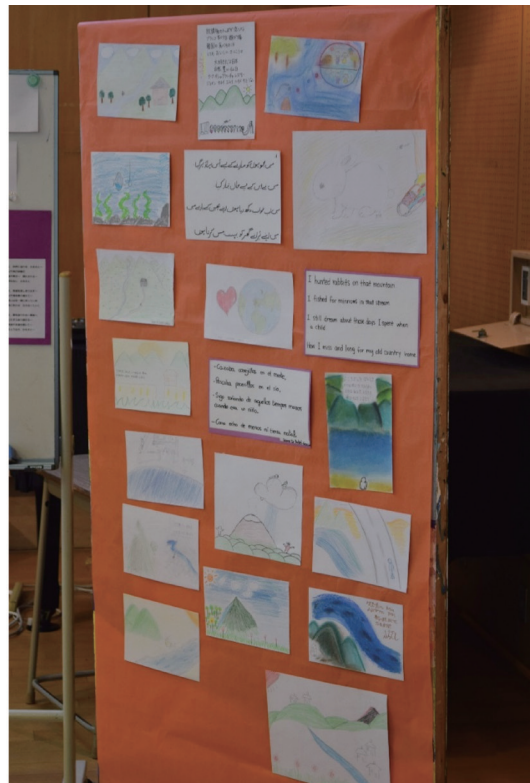
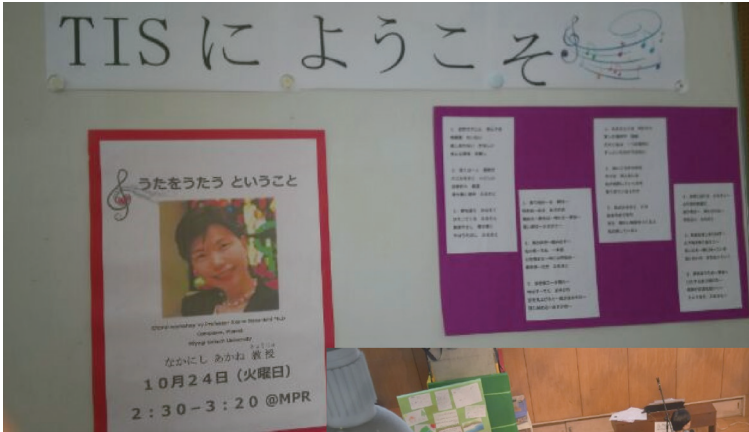
ヒューレット先生の日本語クラスでは、日頃、家庭の都合で突然日本に移り住むことになり、“つまらない”日本語の文法学習などを課せられる生徒達に、歌を取り入れることによって楽しみながら日本語を習得できるよう工夫されている。今回のプロジェクトはそれぞれの生徒が特技を生かせる場面もあり、予想以上に活発に取り組んだとのことであった。

高校2～3年生のクラスでは、ウルドゥー語やスペイン語に訳した生徒、英語の中にガーナ語が混じったバージョンの歌詞を作った生徒もおり、生徒の一人L君は、「マイ バージョンふるさと」を、詩もメロディーもラップ調に作り、女子生徒6名のダンサーを従えたダンスパフォーマンスを完成させた。また、ある生徒がウルドゥー語で清書したものは大変美しく、他の生徒達も彼がウルドゥー語を書くのを見るのは初めてで、文字の美しさに驚きが広がった。人前でふるさとの文字を書いているその生徒は「誇らしく大人っぽく見えた」とのことであった。これらの事前準備を通して、生徒それぞれの中に、故郷への想いや誇りが再確認され、同時にお互いの背景を尊重する空気が生まれたことがうかがわれる。

「故郷に錦を飾る」というコンセプトについてディスカッションをしたクラスもあり、韓国人の2人の生徒が特にこのコンセプトに強い共感を示したとのことであった。民族のアイデンティティーの拠り所が、故国を離れて暮らす生徒達の拠り所ともなっていることが想像される。この点については、事後の授業で「Home, Sweet Home」の歌詞と比べて自分の考えを200字で書くという宿題につなげ、さらに発展させたいとのことであった。また、韓国人の生徒は「エーデルワイス」の事前準備においても、戦争と平和というテーマを深く考え理解しているとのことであり、授業の広義の目的である総合学習としても深められる選曲を頂いたと考える。

## 7. 授業当日の流れ ①生徒の作品発表

授業は2017年10月24日に、TISのMulti Purpose Roomにおいて、あたたかな歓迎のパネルと共に、「ふるさと」をテーマに描いた生徒達の絵や、歌詞をそれぞれの母語に訳して清書したものなど、各クラスの生徒達がそれぞれに準備してきた成果が立ち並んだ中でスタートした。



これらの作品を見る前に、ヒューレット先生の日本語クラスの教室を見せて頂いたが、生徒達は、日頃から、詩を読んで印象的な一節を清書し、絵を添えるような活動に慣れている。当日貼りだされた「ふるさと」作品群も、水彩画、漫画、スマートフォンのライン画面のような“Family Chat”、など、その表現方法は実に様々である。フランスで育った生徒は「うさぎおいし」をジビエの兔料理と直結し、ハンターがうさぎを狙う絵を描いた。日本の生徒達もこの歌詞を「うさぎ美味し」と勘違いすることが多いが、どのような絵に表すであろうか。ウルドゥー語（アラビア文字）の歌詞の清書は一幅の絵のように美しく、書き手の邪心のなさ、まっすぐな素直さが伝わってくるだけでなく、丁寧に精緻なクラフトマンシップさえ感じられる。

生徒達からの歓迎の言葉と講師の紹介があり、続いて高校3年生L君のラップと同じAクラス（高校2～3年生）女子生徒6名によるダンスのパフォーマンスが披露された。L君のラップは日本語、英語、韓国語を混在させながら押韻が工夫された詩となっており、「ふるさと」からインスパイアされた、地球環境や故郷である韓国への想いが素直に反映されている。その詩に合わせて、様々な国籍の生徒達が踊り会場を盛り上げるのも、インターナショナルスクールだからこそ発信できるメッセージとなった。TISでは毎年生徒達のミュージカル公演を行っていることで、様々な国籍の生徒達が力を合わせて演じることによって生まれる力は、作品の本来持つ力を超えたメッセージを発することが想像される。

## 8. 授業当日の流れ ②「ふるさと」前半

まずはみんなで「ふるさと」を歌ってみよう、と、1回目の歌唱を行った。声がとても綺麗で素直な響きを持ち、日本語の歌詞も美しく発音されており、模範的なスクール・シンギングである。

次に、「あなたは歌を歌いますか?」「いつ歌いますか?」「どのように歌いますか?」というシンプルな問いを發していった。一人の女子生徒が「よく車の中で歌う」と答えてくれたので、そこからスタートすることにした。車の中で歌うのと、たとえばこんな風に学校で歌うのと、何が違うだろう? 車の中は閉ざされた狭い空間であり、自分と家族など車に同乗している人しか聴いていない（同乗者が確実に自分の歌を聴いてくれる）環境、安心感、自分自身が運ばれ移動している状態にあることなど、無意識のうちに、自身に歌いたい気持ちを起こさせる状況ができあがっていると考えられる。では、今、車に乗っていると想像して歌ってみよう、と、2回目の歌唱を行った。1回目とは声も発語も発音も全く違う、開放感に満ちた歌唱である。正しく発音しなければ、というようなこまり感がない分、元気に満ちて自由奔放であり、甘えも感じられる。家族と車に乗っている状態が、生徒達にとっては快く心楽しいことであり、自分を受け容れもらえる安心感にのびのびと自分を開放できる状態であることが、歌唱から感じられた。生徒達自身にも、声も歌い方も変わったのはなぜか、自分の中で何が起きていたか、より自分らしくいられる状態であったことを認識してもらった。

続いて、「朝、歌いますか?」の問いに対しては、一人の男子生徒が「シャワーを浴びながら

歌う」と答えてくれたので、そのシチュエーションをイメージして3回目の歌唱を行った。今日はいいことありそう？楽しい予定が待っている？それともまだ眠い？特にイメージを絞り込まずに「朝」「シャワー」というキーワードのみで歌ってみたところ、まだ眠い派が多かったようで、ゆったりとした朝の始まりの歌唱となった。

では夜は？忙しい一日が終わって、いいこともあったかも、そうでないこともあったかも、とにかく一日は終り、今からベッドに入る、と言うシチュエーションを想定して4回目の歌唱を促した。こちらは見事にゆったりとした子守唄となった。3回目の「朝」バージョンとの歌唱の違いは、「朝」バージョンは、自分自身がまだ眠い、自分自身の朝であったのに対し、4回目の「夜」バージョンは、ごく自然に、あたかも地球への子守唄のような客観性を持っていたことである。

生徒達にも、ひとつひとつの歌唱の違いを認識してもらいながら進め、イメージや気分が変わるだけで声も変わり、歌い方も変わるということを感じてもらった。

私達は日々成長し、変化し続ける。私達が歌う歌も、私達の日々の変化に寄り添って変化していく。それが歌を歌うことの、最も価値ある部分である。歌は心で作られる。歌は心から生まれる。歌をうたうということは、私達が生涯持ち続けられる、誰にも奪うことのできない友である。大声で歌いたいときも、無音で心の中で歌うときもあるだろうけれど、歌はあなたと共にある。

今日はこのことを皆さんに伝えに来たのですということを、ここで明示した。

(生徒達が作ったふるさとの歌詞を全員に配布する準備のため、ここで「エーデルワイス」に移り、準備ができた後に「ふるさと」後半に戻ることにした)

## 9. 授業当日の流れ ③「エーデルワイス」

「エーデルワイス」は、映画「サウンド・オブ・ミュージック」の中で、トラップ一家の父親であるトラップ大佐が歌う劇中歌である。

まず1回目の歌唱を行った。とても真っ直ぐな、白い花の清らかさを思わせる綺麗な歌唱であった。次に、物語のあらすじを確認した。エーデルワイスはオーストリアの象徴であり、トラップ大佐はナチスドイツに併合されるオーストリアから家族を連れて逃れる直前に、祖国への思いをこめてこの歌を歌う。この設定を再確認して、2回目の歌唱を行った。生徒達の声も、表現も、自然と居住まいを正し、歌にこめられた想いを尊重する空気が感じられた。

ほとんどの生徒が映画の全編を観たことはないとのことだったので、機会あれば映画を見てみることを勧めた。映画を見た後にもう一度歌ったら、きっとまた、全然違う歌になるだろうね？という投げかけに、強い反応を示す生徒が数人認められた。

## 10. 授業当日の流れ ④「ふるさと」後半

中学生達が事前に作っていた「My version FURUSATO」の歌詞を全員に配布し、時間の許す

範囲で、以下の2人の生徒の作品をとりあげた。

#### Mさんの作品

- 【1 ふるさととはなんだろう/ほくもわからないんだ/おおきくなってやっとわかるよ/その日までまってみよう  
2 家族のあたたかさが/わたしのおもうふるさと/支え合い愛し合い/まんめんのえがお/たからものよふるさと】

#### D君の作品

- 【1 近所ろうじん 住んでる/毎朝誰もいない/話し合わない かなしい/色んな意味 友なし  
2 ほくは一人 孤独さ/けどふるさと いとしい/四季折々 最適/落ち着く場所 ふるさと  
3 夢を語り かなえて/かえってくる ふるさと/家族やさし 落ち着く/やはりたのし ふるさと】

MさんとD君には、それぞれ自作の歌詞を朗読してもらった。

D君の作品の1番だけをみんなで歌ってみると、歌詞が面白いと感じたためか、少しふざけたような色合いが加わった。歌う本人の気分によって、詩のニュアンスやメッセージまで変化する好例である。生徒達に「その歌い方だと、この老人をばかにしているように聴こえないかな?」と語りかけてみた。この老人にも人生があり、今、孤独の中でふるさとを想っている、ということ、D君の詩は、決して揶揄しているのではない。老人の孤独を感じて歌えますか?と投げかけて、2回目の歌唱を行った。すると、生徒達の声が温かみを帯び、同時に「孤独」の表現が深まったと感じられた。生徒達の歌は老人と共にあり、老人をあたたく包みこむことができる歌だった。

Mさんの詩は等身大のティーンエイジャーの素直な心情が表されている。歌詞としてもきちんと段階を踏んでフォーカスされており、効果的に機能する、よくまとまった歌詞である。おそらく生徒達にも共感しやすく、想いを込めやすい歌詞であったと想われ、生徒達の歌唱はさすがしく、未来へのまっすぐな想いが感じられた。

私達の持っている声はひとつではない。私達はたくさんの声を使い分け、たくさんの歌い方ができる。歌をうたうことは私達の持つ表現方法のうちでも、誰もがができるものであり、私達と共に変化し続け、寄り添ってくれる人生の友となりうる。

最後にこのことを再度呈示し、歌と共に、豊かな人生を送ってもらいたいと結んだ。

## 11. 考察

いくつかの発見がある。

まず、共通の民族・文化的背景を持たない生徒達であっても、共有できる感覚は様々なレベル



で存在し、それらが歌う声や歌い方に反映されると見事に演奏が変化するということである。今回の TIS の生徒達においては、日常的なレベルでは、事情はどうあれ今、仙台の地で暮らしているということが共通項であり、この地で暮らすティーンエイジャーの誰もが享受しているような若者文化の中にいることが、多くの共通項をもたらす。より深い精神的なレベルでは、たとえば老人の孤独を想うような、本質的な人間性の部分である。声を合わせることは心を合わせることであり、生徒達が即座に、深いレベルで心を合わせることができ、歌唱に表すことができたことは、生徒達自身の中に深い人間力が醸成されていることの表れであろう。この生徒達を育む学校、家庭の皆様は心よりの敬意を表したい。

次に、イメージや気持ちの変化によって、声や歌唱表現が変化することに対する、生徒達の反応である。セミナーの意図を理解し、積極的に違いを生もうとする空気さえ感じられたことは、自身の可能性だけでなく、異国で生きる生徒達にとって、人との関わり方の可能性にもつながることなのだ気づかされた。授業の数日後に生徒達から送られてきた感想の中に「"The Song is always with you" この言葉絶対忘れません」「This is something I will never forget」などのコメントが多く見られた。反応や言葉遣いがストレートであることもインターナショナルスクールならではの特性とも言えるであろうが、多感な時期にアイデンティティーを意識せざるを得ない環境で過ごす生徒達にとって、自己そのものである声の可能性や、自分の声と共に生きていくことへの気づきは、こちらの意図を超えたインパクトであったことに改めて気づかされた。

英語での指導という点については、セミナーのめざすゴールが明確であれば、言語による違いはあまり問題ではないと感じられた。本テーマのセミナーは、受講者の反応ややり取り、受講者から出てくるキーワードによって、毎回異なる経緯を辿るのであり、手段としての言語よりも、受講生の人生経験やキャラクターによる違いの方が大きくその経緯に影響する。「歌をうたうということ」というテーマは、その違いそのものを再認識し、変化を楽しもうというものであるため、言語による違いはそこに吸収される違いのひとつに過ぎなくなる。

ヒューレット先生ご自身のコメントには、予想以上に、素直にふるさとを題材とした詩を生徒達が書き上げ、個性豊かな優れた作品が出来上がったこと驚いたこと、日本語教師が授業で歌を教材としてとりあげることの意義について、生徒や保護者の理解が深まったと思われること、生徒達がそれぞれの得意分野を発揮して積極的に取組み、協力して作り上げることを学び、クラスの結束が強まったこと、等が記されており、出張授業をご依頼頂いた当初の目的は、狭義においても広義においても、ある程度果たされたものと推測する。特に、生徒たちの取り組みの熱心さは日常的に生徒を見守っている先生にも目を見張るものであったようで、異国で暮らす生徒達にとって「ふるさと」という題材が、それぞれ漠と抱えている不安や孤独に向かい合うきっかけをもたらしたものと推測される。この選曲はヒューレット先生はじめ TIS 教員の希望によるものであり、慧眼に感謝したい。

生徒達の感性が豊かであることはもちろん、特に歌唱の訓練を受けているわけでもない生徒達が、これほどの声の変化、歌唱表現の変化をもって即座に反応できることは、TIS 全体ののびやかな雰囲気や、日頃の教育の中で生徒達自身が個々を尊重されていると実感している下地に負う

ところが大きいと感じている。James Steward 校長先生をはじめ、授業を見守り、ご協力下さった教員の皆様方、そして、事前準備から当日の運営、事後の生徒達のふりかえりに至るまで、多大なるご協力を頂いたヒューレットえり子先生に、心からの謝辞を捧げたい。

1. ふるさととはなんだろう～  
ぼくもわからなんだ  
おおきくなってやっとわかるよ  
その日までまってみよう

2. 家族のあたたかさが  
わたしのおもうふるさと  
支え合い 愛し合い  
まんめんのえがお  
たからものよ ふるさと

1. 近くにある 公園  
なにげ長い すべり台  
遊べる森 一つもない  
Wifi 無い ふるさと

2. 冬はいつも もちだけ  
二階の部屋に カメモシ  
冷蔵庫の中身 ほぼ炭酸  
夏は暑い ふるさと

1. 生い茂る木々に囲まれ  
黄金色に輝く大地  
朝焼けに染まる七ツ森  
生命豊かな 理想郷

2. 笑顔行き交る人々  
心落ち着くこの空間は  
今もめぐりて思いでひそむ  
希望にあふれる我が故郷

1. 熊に追われ 山から  
逃げるのが 日常  
夢は今も 熊を狩ること  
みなで囲む 熊鍋

2. 春は桜 見ながら  
夏は森で 虫捕り  
秋は木々が赤く染まると  
冬の朝の 雪かき

3. 志が高くて  
いつの日にか行きたい  
東京目指して夢を見続け  
今となれば思い出

1. 緑豊かな 山並み  
清いせせらぎ 閑伊川  
自然と人との 未来を創る  
皆やすらぐ ふるさと

2. やさしいまち 宮古市  
支えあって 生きてる  
市民と市民の 絆もかたい  
帰りたくなる ふるさと

1. 海が見える ふるさと  
夏も冬も 素敵だ  
日本に六年目 戻りたいな  
忘れがたき ふるさと

2. 留學生活 疲れた  
懐かしいな ふるさと  
友達に会って 遊びたい  
思いつく ふるさと

1. しぜんいっぱい ふるさと  
かわのなかで あそんでる  
こどもたちが かえると  
父と母に むかえられる

2. じっかにかえる どいなか  
父と母が まっている  
母のおいしい ゆうはん  
みんなえがおで たべる

1. ふるさととは 何だろう  
育った場所や 地域  
だと私は 一つの場所に  
ずっといたわけではない

2. 幼いころから知る  
方々は 何人もいる  
私が成長していくのを  
見てきている人たち

3. 私のふるさと とは  
私を今まで知り  
支え 暖かい環境をつくる人  
私の愛している人

1. 私のふるさと自然よ  
山とはたけ たくさん  
いろんな人がいるけど  
とてもあたたかいふるさと

2. パパとママおもいだす  
ママの料理食べたい  
自分ではうまく作れないよ  
早くもどりたいたい ふるさと

1. 自然に溢れる ふるさと～  
山や海が綺麗だ  
緑や青が～ 満たされる～  
何も無い ふるさと

2. 希望を探し走り出す～  
山や海を乗り越えて～  
思い出と一緒に持っていく  
風にあわせ 立ち去っていく

3. 夢を追うため～都会へ  
ひたすら走り続ける～  
家族や友達を置いて～  
さようなら ふるさと～

1. 無数にある コンビニ  
数え切れない 自販機  
空気が車のガスで出来ない  
でも便利だよ仙台

2. 実は生まれ いなか町  
にわでトカゲ 顔出す  
たまに会ういとこ大きくなってる  
冬はこたつ 夏はジュース

1. 登り始め～る 朝日～  
咲き始～める あさがお  
眺める～景色は～晴れた～青空～  
思い緩る～ふるさと～

2. 速い歩き～踏み出す～  
先の見～えぬ 一本道  
心を弾ませ～時には布染め～  
景色ゆ～たか ふるさと

3. 歩き疲れ～夕暮れ～  
時はす～でに おそけり  
空を見上げると～星がほほえむ～  
閉じ始める～あさがお～

1. 近所ろうじん 住んでる  
毎朝誰 もいない  
話し合わない かなしい  
色んな意味 友無し

2. ぼくは一人 孤独さ  
けどふるさと いとしい  
四季折々 最適  
落ち着く場所 ふるさと

3. 夢を語り かなえて  
かえってくる ふるさと  
家族やさし 落ち着く  
やはりたのし ふるさと

私のふるさと国分町

ネオン光る 分町  
夜の町は 楽しい  
少しのんでは かおが 火てり  
みんな のみに 国分町

今日は何を食べよう  
やきとりに ビール うまい。  
遊ぶだけじゃないよ 分町  
みんなも行こう 分町